

本日の学び 「最後の食事」テキスト：マルコ14章12節-26節

【理解の手がかりとして】

12 節に「除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日」とある。ここで「過越祭」と「除酵祭」について触れておく。

「過越祭」とは、エジプトで奴隷とされていたイスラエルの民を神様が救い出して下さったことを記念する祭りである。イスラエルの民をなかなか去らせようとしなかったエジプト王ファラオが、ついに彼らの解放を認めたのは、神の使いがエジプト人の長男、最初に生まれた雄の家畜を全て打ち殺すという恐るべき災いを下されたことによってであった。その時、イスラエルの民の家においては、小羊が犠牲として殺され、その血が戸口に塗られ、その血の印のある家を神の使いは通り過ぎ、つまり「過ぎ越し」て何の災いも下さなかった。イスラエルの民は、この小羊の犠牲の血によって災いから守られ、エジプトからの解放を与えられた。このことを記念して、「過越の小羊」と呼ばれる羊の血を戸口に塗り、その肉を食べるのが「過越祭」である。

一方、「除酵祭」とは、この過越祭に続いて七日間守られる祭り。パン種を入れなくて、つまり酵母を除いて焼いたパンを食べるので「除酵祭」と呼ばれている。出エジプト記に「エジプト人は、民をせきたてて、急いで国から去らせようとした。そうしないと自分たちは皆、死んでしまうと思ったのである。民は、まだ酵母の入っていないパンの練り粉をこね鉢ごと外套に包み、肩に担いだ」（出エジプト 12:33-34）とある。つまりイスラエルの民は、酵母を入れて発酵させている暇がないほど急いでエジプトを脱出した。その出来事を記念して「除酵祭」が行われるのである。このように、過越祭も除酵祭も、イスラエルの民をエジプトでの奴隷状態から解放して下さったという、神様の大きいなる救いの出来事を記念する祭りである。

さて、過越の食事を食べることが過越祭の中心である。イエス様の当時、この過越の食事をエルサレムの市内でとることが重んじられていた。そのためにこの祭りの時には多くの人々がエルサレムにやって来た。そうすると、エルサレムに家がない人々にとっては、どこにこの食事の場を確保するかは大きな問題となった。12 節で弟子たちがイエス様に「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」と尋ねたことにはそういう背景がある。

その問いに対して、イエス様は「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出会う。その人について行きなさい。その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい」（14:13-15）と言われた。注目は 15 節の「席が整って」という言葉。そう、整っていた。すでにそこに準備されていた。イエス様の言葉通り事は進んでいく。これはとても注目すべきこと。思えば、この御子イエス様の人生というものは、神のご計画によって始まった。その誕生の次第について伝えるマタイ福音書はこう証言している。「『マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。』このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」（マタイ 1:21-22）と。そうして始まったイエス様の人生。民を罪から救う、それがイエス様の人生の使命。そのイエス様の人生の最終段階、それがもう来ている。そこで開かれる「最後の晩餐」、これもまたすべて神のご計画の内であったわけである。

その晩餐の席上に招かれているのは 12 人の弟子たち。しかしその 12 弟子の彼らの内に、「裏切ろうとしている」(14:18) イスカリオテのユダもいた。既に祭司長たちのところへ行って、「どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた」ユダもこの食卓に招かれた。その席でイエスはこう言われた。「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」(14:18) と。

この言葉を受けて、弟子たちは「心を痛めて、『まさかわたしのことでは』と代わる代わる言い始めた」(14:19)。ユダ以外の 11 人も、それぞれに傷を、それはイエス様に対する後ろめたさを持っていたのかもしれない。そしてそれは、この私たちも皆、そうではないか？ 並行箇所のマタイ福音書では、ユダ自身の行動が記されている。「イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで『先生、まさかわたしのことでは』」(マタイ 26:25) と言った。するとイエス様はユダに「それはあなたの言ったことだ」(同) と返答された。この「それはあなたの言ったことだ」との切り返しはとても含蓄ある言葉。これは、私たちの罪認識が、誰かから指摘されたものではなく、自覚的に告白されるべきものであることを指している。そしてその自覚的な告白を、イエス様はユダ自身から引き出されたのだらうと思う。そしてそれは、他の 11 人の弟子たちにおいてもそう。彼らもまた「まさかわたしのことでは」と自らを見つめずにはいられなかった、・・・イエス様と出会って、イエス様に問われるとき、そのように誰もが自らを見つめさせられる。そしてそれは私たち皆そうなのである。

「人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその人は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった」(14:21)。「生まれなかった方が、その者のためによかった」とは、大変衝撃的な言葉。ここはとても解釈に難しいところ。私はこの意を、「人の子」すなわちイエス様を裏切る(信じず、背を向ける)そのような生き方は、その人にとって大変不幸なことで、その人の命、その人生が神の祝福からほど遠いものになってしまう、と受け止める

「最後の晩餐」において、イエス様は弟子たちに、ご自分の体と血とにあずかるためのパンと杯を与えて下さった。それは、十字架を指し示している。そこで捧げられるキリストの命、からだと血をもって、例外ない「あなたがた」のための救いを実現するための十字架である。この「パンと杯」は、私たちにも差し出されている。

(聖書教育より) 「『主の晩餐』について話しあってみましょう。・・・どんな意味があるのでしょうか。率直な感想を出し合いましょう。」(子どもクラス)

【報告・祈りの課題】

1. 3.11 東日本大震災から 15 年を覚えて。
2. 受難節に際して～世界戦争への危惧、日本国の当事態に対する態度のために祈る。
3. 治療・療養中の方々、高齢信徒の生活のために。
4. 2025 年度の教会財政(収支)、3/29 予算総会のために。
5. 3/15 (主) CS、主日礼拝〈相模原(証:滝澤執事、宣教:斎藤協力牧師)・会堂(宣教:吉田牧師)〉、部会、部長会・役員会(現新合同)
6. 個々の祈りの課題

--